

コラム第 11 回 「勉強するなら金をくれ（後編）」



勉強の「できる」「できない」の話をする時に、遺伝や個人特性などを出してしまうとややこしくなるので、今回のコラムでは「その子が、自分のもてる力をしっかり発揮する」という意味で、勉強ができるようになるための秘訣についてお話します。それには順番が大事です。

①まず初めに、家族関係が安定していること、少なくとも日常的にいがみ合っていないことです。家族間で怒り、苛立ち、非難、抑圧など感情的なやりとりが毎日のようにある場合、子どもは日々「不安」の毒素を溜め込みます。するとストレスによる緊張状態が続き、自律神経（緊張と緩和）機能の調整が難しくなり、先々で慢性的な不安感、気力の湧きにくさ、睡眠や摂食等に支障が起きるリスクが高まります。反対に、子どもは家族に笑顔や対話が多いと「安心」し、心身および脳が本来通りに機能し、「意欲」的に活動できます。^{たんらん}団欒の大事さはここです。

②次に「経験」と「刺激」です。①の安心感と意欲が育まれている子どもは、好奇心や興味の枝葉が広がります。そんな時は、やりたいことを、やりたいようにさせることです。乳児期であれば自分でご飯を食べたがる、幼児期であれば同じ絵本を何度も読みたがる、帰り道の公園で遊びたがる。様々な興味にじっくり繰り返し応えていくこと。それも子どもの望むタイミングを逃さないために、親自身が一緒にいる時間を大切に、一緒に経験することを心がけるのが、子どもに良い「経験」と「刺激」を積み重ねる一歩です。ここでは、大人が良かれと思っている経験や刺激が、必ずしも子どもにとって良いとは限らないことに注意が必要です（一方通行にご注意）。

③さらに、経験や刺激を積み重ねる中で「褒め」ることが肝心です。上辺でなくきちんと褒めるためには、関心をもって経過を見ることが不可欠です。褒め言葉の文言とタイミングが自然とひらめくようになったら、^{おやぎょう}親業の達人です。適切な文言を選択して適切なタイミングで褒めることは「見てもらっている、分かってもらえている」という気持ちを高めます。さらに言うなら、褒めることは、子どもを「快く」することです。「褒め」られて「快く」なると脳内でドーパミンが分泌され、もっとこの報酬をもらいたいという意欲が生じます。つまり、自分から学習する循環が生まれるのです。

以上が、子どもが学習に前向きに取り組み、持てる力を発揮するために大人ができることです。家族が笑顔と対話で日々「安心」と「意欲」を育むこと、時間と手間をかけて子どもの好奇心に答え、一緒に「経験」を積みながら「刺激」を与えること、そして子どもが褒めてほしい大事な場面を見逃さず、その瞬間に「褒め」て「快い」気持ちを子どもの心に根付かせること。加えて、親自身が日々学習をしていて、学習する意義や喜びを伝えられることが大事です。ここまで読み進めて、苦い気持ちになった方もいるので

はないでしょうか。

私自身書いていてなんですが、なかなかの難易度だと思います。とは言え、親が学習に前向きで勉強ができる子どもを求める上で、まず親の手間暇と努力が求められること、親自身も子育てを通じて学習・成長することが求められるあたりは、世の中バランスが取れていると感じるところです。

さてここで、前回触れた「勉強しないとダメでしょ」「将来進学や就職できないよ」といった言葉が、なぜ子どものやる気や勉強行動を^{そがい}阻害してしまうのか、もう一つの理由が明らかになりました。勉強しなさいと言っている大人の感情は「不快」です。そして人は「不快」なものを避けて「快い」ことを繰り返したいと欲求する性質を持っています。つまり、不快な感情を持つ大人の言う不快な言葉を、子どもは無意識に避けるのです。注意ばかりする先生を子どもたちが嫌うのも同じ原理ですね。

今回のコラムは、子育てや教育に携わる者として、私が積み重ねてきた日々を元に書いたものです。そして、まさに松江未来学園が実践していることの一部でもあります。本来、①と②は脳が著しく発達する乳幼児期がもっとも大事な時期で、③は乳幼児期と学童期に大切なことです。こころの育児書を著した原田正文さんは、心の発達^{そがい}は身体の発達のように目に見えるわけではなく、「心の歪みや停滞には気がつかないものです。それがはっきりと見えるようになるのは思春期になってから」と述べています。

私も含めて完璧な親などいない中で、誰もが「あの時もっとこうしておけばよかった」と後悔することがあるのではないのでしょうか。心や脳の成長は目に見えないものです。その成長を見守る親は、「子どもについて実はよく知らないのではないか」という出発点に立ち、気づいた時点から子育ての見直し・やり直しをしていく気持ちが大切なのかもしれません。

野中浩一 拝